「コフィン・テキスト」における「二柱のマアト」(*Mꜣꜣty*)Dual Maat (*Mꜣꜣty*) in the Coffin Texts肥 後 時 尚^{*}
HIGO Tokihisa

ABSTRACT Maat (*mꜣꜣt*) is an ancient Egyptian comprehensive concept connoting justice, truth, and fairness while focusing on the meaning of the order of the universe. This concept was deified as a goddess of justice or truth (*mꜣꜣt*) and appeared in various texts throughout ancient Egyptian history. This article analyzes the portrayal of goddess Maat in the Coffin Texts, which are known as funerary texts during the Middle Kingdom. In addition to the Pyramid Texts from the Old Kingdom and the Book of the Dead from the New Kingdom, the Coffin Texts are some of the most important resources for understanding ancient Egyptian religion. The Coffin Texts contain over 1,000 spells and include more than 190 descriptions of Maat requiring further examination.

Furthermore, this article examines the eight expressions known as the Dual Maat (*Mꜣꜣty*), written as the dual form of the goddess Maat. The reduplication of a deity who was usually represented in a single form is unique among ancient Egyptian deities. The results of the analysis reveal that the Dual Maat reflected three noticeable qualities of Maat: (1) the dual goddesses had a specific relationship with Sokar, the god of the netherworld (spells 479 and 660); (2) they were independent goddesses that empowered and stood by the deceased (spells 660, 149, and 416); and (3) they developed a unique relationship with Re, the sun god (spells 682 and 693).

キーワード：古代エジプト, マアト, コフィン・テキスト, エジプト宗教, 二柱のマアト

I. はじめに

古代エジプトのマアト (*mꜣꜣt*) は、「世界の秩序」という意味を中心として正義や公正、真実、秩序など多くの意味を併せ持つ包括的な概念である。この概念は、およそ三千年におよぶ古代エジプトの歴史を通じて、王権や思想、文化に絶えず影響を与えた。王は国を統治し、秩序を維持するための神的属性の一つとしてマアトを備え、また同時にマアト、すなわち秩序の維持は王の義務であった。一方でこの概念は、しばしば神格化され、神話にも現れる。さらに、マアトは、現世における行為の善悪の判断基準として死後の世界にも登場する。膨大な資料に現れるマアトの概念は、複数の意味や側面を併せ持った。

このような重要性和特殊性から、マアトの概念は早くは19世紀から注目されてきた。ヴィーデマン (Wiedeman 1887) に始まるマアト研究は、その後ブリーカー (Bleeker 1929) やモレ (Moret 1940)、フランクフォート (Frankfort 1948)、ウィルソン (Wilson 1954) をはじめとする多くの研

^{*} 関西大学大学院文学研究科博士課程
Graduate Student, Graduate School of Letters, Kansai University

究者に引き継がれ、基礎的な理解が確立された。近年では、リヒトハイム (Lichtheim 1992)、ティーター (Teeter 1997)、カレンガ (Karenga 2004) によってマアトの持つ特定の側面に関する研究がなされ、図像表現や文献資料に現れるマアトの詳細な分析が継続されている。⁽¹⁾しかし、先行研究で取り扱われた資料は、マアトに関連する数多くの資料の一部にすぎず、マアトの持つ性格については未だ不明の点が多く、とりわけ葬祭文書に現れるマアトに注目した研究は、十分とは言い難い。そこで、本稿では、従来のマアト研究において注目されてこなかった中王国時代の葬祭文書である「コフィン・テキスト」に着目し、そこに見られる「二柱のマアト」(Mꜣꜣty) と呼ばれる特殊な形態の事例を取りあげ、これまで論じられてこなかったマアトの一側面を明らかにする。

古代エジプト人が想起した死後の世界や思想を如実に反映した文献資料群である葬祭文書は、古王国時代の「ピラミッド・テキスト」や中王国時代の「コフィン・テキスト」、そして新王国時代以降に登場する「死者の書」に代表されるように、エジプトの各時代を通して使用された。それらはマアトへの言及も数多く含んでおり、死後の世界におけるマアトの研究において最も重要な資料であるといえる。しかし、「死者の書」に登場するマアトの特徴や役割がしばしばとりあげられる一方で、その他の葬祭文書に記されたマアトへの注目は少ない。とりわけ、「コフィン・テキスト」には筆者が確認する限りで190例を超えるマアトの記述が含まれており、中王国時代の死後の世界におけるマアトの一側面を探究するための最も有効な資料の一つだといえる。筆者は「コフィン・テキスト」のマアトの事例を検討するなかで、「二柱のマアト」と呼ばれる特殊な表現を確認した。本稿では、これまで注目が集められなかった「コフィン・テキスト」におけるマアト研究の一つとして、同資料に現れる「二柱のマアト」の事例を取りあげ、この特殊な一側面を考察する。

II. 「コフィン・テキスト」

「コフィン・テキスト」は、主として中王国時代の棺の内側に記された呪文の総称である。この呪文集は、他の葬祭文書と同様に、故人が来世で復活するために必要とする呪文で構成されており、神々への賛歌や死後の世界の描写、変身の呪文や魔物を追い払うための呪文、供物の呪文などからなる。この「コフィン・テキスト」の最大の特徴は、「ピラミッド・テキスト」のように王族にのみ使用されたのではなく、有力な州侯やその妻といった王族以外の人々にも使用された点にある。また、呪文の種類が多いだけでなく、棺の出土地によって呪文の種類や配列が異なるなどの地域性が見受けられることも知られている。多くの呪文にテキストごとの多様性がある点も特徴の一つであり、中王国時代における古代エジプト人の思想を探るうえで、最も重要な資料の一つに位置づけられている。

膨大な資料に記された「コフィン・テキスト」は、1935年から1961年にかけてデ・バックによって編纂された (CT: 以下略号一覧参照)。149種類の資料から呪文を転写・配列した全7巻が出版されると、「コフィン・テキスト」は、他に例を見ない中王国時代の葬祭文書として多くの研究者の関心を集めた。その後、1992年にデ・バックの生誕100周年を記念して開催された国際会議 *The*

(1) その他の代表的な研究には、Morenz 1973; Altenmüller 1975; Tobin 1989; Assmann 1990; Hornung 2005 が挙げられる。

World of Coffin Texts では、文献学や考古学、宗教学、そして言語学といった多様な視点に基づく「コフィン・テキスト」とそれが記された木棺資料に関する近年の研究成果が公表された。

しかし、呪文の内容に宗教的・神話的要素が多分に含まれていることから、テキストの理解は極めて困難であり、「コフィン・テキスト」の研究は今なおその途上にある。ウィレム (H. Willem) の言葉を借りれば、「エジプト学研究者は、依然としてそれらの理解に達するための始まりにいる」(Willems 1996, v) のであり、今後の更なる研究の進展が望まれる。マアト研究においても同様に、「コフィン・テキスト」のなかに 190 例に及ぶマアトの記述が確認される一方で、これらの事例に注目した研究はこれまで十分になされていない。したがって、「コフィン・テキスト」の翻訳と解釈を踏まえ、各呪文に登場するマアトの記述を読み解くことは、中王国時代におけるマアトの特徴や意義をより具体的に理解する一助となりうる。

III. コフィン・テキストにおけるマアトの一側面

1. 二柱のマアト (*Mꜣꜣty*)

「二柱のマアト」(*Mꜣꜣty*) と明確に記述されたマアトの表現は、「コフィン・テキスト」の 7 種類の呪文から 8 例確認できる。⁽²⁾ マアト (*Mꜣꜣt*) の双数形である *Mꜣꜣty* は、この語の多くに用いられる決定詞 が示す通り、通常は二柱のマアト女神を意味するが、おびただしい数の古代エジプトの神々のなかで、本来一柱である神が二柱の神として表現される例は極めて少ない。⁽³⁾ さらに、この二柱の女神が宗教上、重要な位置にあったことは、「死者の書」における最も重要な死者の裁判の場面において、*Mꜣꜣty* の語が「二柱のマアトの間」(*wsꜣht Mꜣꜣty*) と呼ばれる裁判の場の名称に用いられていることにより示される。

以下、*Mꜣꜣty* の記述を含む 7 種類の呪文に注目し、そこに見られる「二柱のマアト」の特徴を考察する。呪文については、フォークナー (Faulkner 1973-78)、バルゲ (Barguet 1986)、カリエ (Carrier 2004) の研究を参照しつつ、蓋然性の高い翻訳と解釈を提示する。なお、呪文の番号と表記はデ・バックの集成にしたがい、象形文字の転字にあたって補完されるべき文字を [], 欠如した音を () で補足した。各呪文の *Mꜣꜣty* の事例には事例番号 (i-viii) と傍線を付す。

2. 下界の神ソカル (*Skr*) との関係

(事例 i) 呪文第 479 章 CT 6, 41r-42e, [P. Gard. 2]

41 [r] *mꜣꜣ wi whꜣw rmt*
[s] *dg(i) n.i whꜣw ntrw*
[t] *n hꜣfꜣ.tn wi n ꜣmm. tn wi*

(2) 呪文第 1033 番の資料 B1C, B3L 上にも、*Mꜣꜣty* の記述が確認されたが、B1C を除く他の 13 点の資料上では *nb mꜣꜣt* で表記されており、文意的にも「二柱のマアト」の意味となり得ないため、誤記と判断し、本稿では割愛した (CT 7, 268)。

(3) その他の双数形で表される神としては、*Rꜣwy* や *Rwty*, *ꜣrty* などが挙げられるが、いずれの神も本来の一柱神としての性格は乏しく、二柱へと変化することで新たな特徴を示す事例であると考えられる。また *Wꜣp-wꜣwt ꜣmꜣw* や *Wꜣp-wꜣwt Mꜣhw* のように明らかにエジプトの二元性との関連を示す人格神の組み合わせも存在するが、マアトの双数形の内容が特定されうる事例はこれまで確認されていない。

- [u] *n ir(i).tn mrt. tn r.i*
 [v] *n-ntt pr(i).n.i is m ib.s*
 42 [a] *snšnš.n.i hr ddt.s m Skr n ⁽⁴⁾Msty*
 [b] *wnm.i r ⁽⁵⁾[.i] fgn.i m rt.i*
 [c] *mz wi nt(y)w*
 [d] *dwz [w]i iwt(y)w*
 [e] *di n.i nt(y)w im is*

私を見よ！ おお、人々を捕える者たちよ。私を見よ！ おお、神々を捕える者たちよ。汝らは私を握らないであろう。汝らは私を掴まないであろう。汝らは汝らの望むことを、私に対して行わないだろう。なぜなら私はその(汝の望みの)⁽⁶⁾望みから出たからだ。私は「二柱のマアト」のソカルの船によって、その支配から逃れたからだ。

私は[私の]口によって食べ、私の肛門によって排泄する。私を見よ！ おお、存在する者たちよ。私を崇拜せよ！ おお、存在しない者たちよ。そこにいる存在する者たちが私に崇拜を与えんことを。

第479章は、「網から逃れるための呪文」の一種である⁽⁷⁾。死後の世界では、鳥、もしくは魚となった故人を地上から天へと張り巡らされた網によって妨害する神が登場する。故人は網にかからないために、網やその他の部分の正しい名称を覚えなければならず、これはそのための魔除けの呪文である (Guglielmi 1976-92)。「存在する者」(*nt(y)w*)、「存在しない者」(*iwt(y)w*)については、この語の具体的な内容は不明であるが、それぞれ解釈冒頭部分の「人間を捕える者たち」(*whrw rmt*)と「神々を捕える者たち」(*whrw ntrw*)に対応するものと考えられる。

呪文の所有者は、人間や神々を捕える「漁師」に対し、自分を妨げることはできないと明言し、その手段として『「二柱のマアト」のソカルの船』への言及がなされている。これは、「二柱のマアト」が担う死後の世界での役割と、ソカルと「二柱のマアト」との関係を示している。

「二柱のマアト」とソカルの関係を示す同様の表現は、呪文第660章 (iii) にも確認される。

(4) 42aの解釈は、研究者ごとに異なる。フォークナーは「私は二柱の真実のソカルとしてその手中から逃れた」、バルゲは「私はソカルと二つのマアトに属する者によってその手から自身を引き離れた」、カリエは「私がソカル、「二つのマアトに属する者」として自身を彼の支配から引き離れたからだ」としている (Faulkner 1973-78, vol. 2, 123; Barguet 1986, 314; Carrier 2004, 1178-1179)。Skr n Mstyの解釈に注目すると、フォークナーが「二つの真実のソカル」とする一方で、バルゲ、カリエは「マアトに属する者」とし、またバルゲはMstyとソカルを並列表現として、カリエは両者を同格表現として解釈している。さらに、この呪文中の表現に関して、ヘルクは、Mstyを「マアトの船」と訳している (Helck 1980, 1112)。これらの解釈の相違は、文脈上の判断が困難であることに加えて、Mstyが「二柱のマアト」、「マアトに属する者」、「マアトの船」と解釈できるだけでなく Skrも「ソカル神」と「ソカルの船」の二つの意味を持つ点に起因する。筆者は、Msty n Skrを漁師から逃れるための手段であると解釈し、また次の呪文第660章の内容と併せて『「二柱のマアト」のソカルの船』と仮訳した。ここでは、Mstyと下界の神であるソカルの関係だけが明らかである。

(5) 続く m rt.i との同格表現と判断し、補足した。

(6) 「その」を意味する接尾代名詞 .s から、ここでは mrt を指すと解釈した。

(7) 正式な呪文の題目は「*idit*の網、*ibt-t*、*isswt*の網、*dsf*の罫から逃れるための呪文。なぜなら私はそれを知っており、その名前を知っているからだ」(*r n prt [m] idit ibt-t isswt dsf n-ntt wi rh.k(wi) s(y) r h.k(wi) rn.s*) である。*ibt-t*、*dsf*のいずれも網の名称と考えられる。(CT 6, 3)

(事例 ii, iii) 呪文第660章 CT 6, 282a-f [B1Bo]

- 282 [a] *hpr.n N pn nn hprt pt nn hprt t3*
[b] *h_{dn} pw n m-h_t psw n N pn*
[c] *iwt(y) sh_m w3w3 im.f*
[d] *nsw pw pr(i) fnd*
[e] *rdi.n (iii)M3ty c.sn r N pn*
[f] *hkr.t(i) hrw n skrkr.f m Skr n (iii)M3ty*⁽⁸⁾⁽⁹⁾

このN（死者）は天が生まれる前に、大地が生まれる前に生まれた。彼（このN）はこのNが調理した後のヘジェン植物、ウアウアがそれに対して力を持たないもの（植物）である。

彼は王、鼻が前に出た者である。⁽¹¹⁾「二柱のマアト」は彼女らの腕をこのNに置いた。彼女らが空腹であるとき、このセケルケルの日に、⁽¹⁰⁾「二柱のマアト」のソカルの船の中で。

第660章は、B1Boのみに記述が残る長大な呪文である。まず、呪文の所有者は自身の起源が神々よりも早いことを主張し、「二柱のマアト」から力を得る。この呪文には、マアトに関する語は4例確認され、そのうち前半の2箇所がM3tyの事例にあたる。

翻訳の前半部分では、棺の所有者は、自身の創造が原初の時から始まり、自身が魔物を寄せ付けないヘジェン植物であり、王であると述べており、その文脈のなかで「二柱のマアト」が彼に腕を置いている（事例ii）。この「腕を置く」(*rdi* c)は葬祭文書にしばしば見られる表現であり、主として神々が故人に力を与えるという意味で用いられる。⁽¹²⁾したがって、ここでは二柱のマアトが呪文の所有者に力を与える存在であることがみてとれる。マアトは、正義と真実を示す象徴として頻繁に用いられるが、行為を伴う独立した女神として描写されることは少なく、このように神格化されたマアトが故人に対して力を与える事例は極めて稀である。しかしこの事例から、「二柱のマアト」が死後の世界の危険から身を護る力を故人に与える女神とされていたことがうかがえる。

(8) *skrkr*は、意味不明な名詞である。カリエ、バルゲはそれぞれ異なる訳を当てているが (Barguet 1986, 408; Carrier 2004, 1502–1503)、いずれの解釈も根拠が不明瞭である。フォークナーは、後述のソカルとは無関係であるとのみ指摘している (Faulkner 1973–78, vol. 2, 230)。

(9) 282fについては、フォークナーが「…の日に二柱のマアトのソカルの船の中で、彼女が空腹な状態で」、バルゲが「二柱のマアトはその移動 (?) の日に彼女らが空腹な状態で、二柱のマアトのソカルとして」、カリエが「彼が二柱のマアトのソカルの船の中へ押し寄せるその日に、空腹な状態で二柱のマアトが」としている (Faulkner 1973–78, vol. 2, 230; Barguet 1986, 408; Carrier 2004, 1502–1503)。いずれの解釈も *hkr.t(i)* を状態形とする点での見解の一致が見られるものの、*m Skr n M3ty* の解釈が異なる。*M3ty* に関しては、フォークナーとカリエが「二柱のマアトのソカルの船のなかで」とする一方で、バルゲは「二柱のマアトのソカル」としている。この節の呪文の内容は下界に関係するため、ここで登場する *Skr* の語は下界を移動するソカルの船を指すと判断できる。また、*Skr* に前接する *m* が場所を表す前置詞であると解釈し、ここでは *m Skr n M3ty* を「二柱のマアトのソカルの船のなかで」と解釈すれば、前節 282e の *M3ty* との齟齬も生じない。

(10) 魔物の一種である (Leitz 2002, vol. 2, 244)。

(11) 字義通り訳したが、具体的な意味は確定できない。フォークナーは「調べる者」、バルゲが「不安な者」、カリエは「怒った者を外に出す者」と訳しているが、論拠は不明である (Faulkner 1973–78, vol. 2, 230; Barguet 1986, 408; Carrier 2004, 1502–1503)。

(12) 古王国時代の「ピラミッド・テキスト」にも同様の表現が見られる。例えば、呪文第600番では、カーを受け継ぐため、故王がアトゥム神にその腕を置く（力を与える）ことを求めている (Sethe 1910, 373)。

続く事例 (iii) では、事例 (i) と同様に「二柱のマアト」とソカルとの関係を示す表現が見られる。神話上でのソカルの役割の一つは、太陽が夜に下界を旅するのを助け、朝に復活させることであった。ここでは、下界で故人を保護するソカルの船を司る者として「二柱のマアト」が表現されたと考えられる。

呪文第479章と呪文第660章の *Msty* の三つの事例は、「二柱のマアト」の持つ二つの特徴を示す。まず、呪文第479章の事例 (i) と第660章の事例 (iii) は、ソカル神と「二柱のマアト」との関係性を示しているが、両者の結びつきは、古王国時代の「ピラミッド・テキスト」の呪文には見られず、「コフィン・テキスト」が初出である (肥後 2015, 220–225)。また、第660章の事例 (ii) は、故人に力を与える独立した女神、「二柱のマアト」について言及している。下界のマアトは、現世での善悪の基準や、正義あるいは真実の象徴として認識されるのが一般的だが、ここでの「二柱のマアト」は、下界で故人に力を与える神格とされている。

3. 独立した人格神としての *Msty*

(事例 iv) 呪文第149章 CT 2, 250b-c [S1P]

250 [b] ⁽¹³⁾ *iw whm r-gs* ⁽¹⁴⁾ *Msty*
[c] *rdit shm.i m hft.i* ⁽¹⁵⁾

それ (私の叫び) は、私を私の敵に対して力強くする「二柱のマアト」の前で繰り返された。

第149章は、変身の呪文と、棺の所有者に力を与えるための呪文である。⁽¹⁶⁾「コフィン・テキスト」のなかで大きな比重を占める変身の呪文は、危険に溢れた来世において、故人が身を守るために利用された。⁽¹⁷⁾

(13) 主語が省略された *sdm.f* 形となっており、解釈が分かれている。バルゲとカリエが *whm* の後に一人称の接尾代名詞 *.i* が省略されていると解釈する一方で、フォークナーは、非人称の受動文として解釈している。ここで動詞に注目すると、「繰り返す」を意味する動詞 *whm* は他動詞であるため、バルゲやカリエのように「私は繰り返す」とした場合、目的語が欠如した文となる。したがってここではフォークナーの解釈にしたがい「それは繰り返される」と受動文として解釈した。また、249および250には資料毎に記述内容の相違が見受けられるものの、ここで省略された「それ」は、249aの「私はあの敵のゆえに叫んだ」(*iw.n.i hr hft pf*) の内容を指すと考えられる (Faulkner 1973–78, vol. 1, 128; Barguet 1986, 437; Carrier 2004, 360–361; CT 2, 249–250)。

(14) *Msty* の表記について、S1P, S1Chass, S1C^b, S2C^a には *Msty* と双数形で、S2C^d, S1C^a では *msty* と単数形で記されている。双方の解釈が考えられるが、S1P, S1C^b, S2C^a の の表記のように、女神の決定詞が意図的に二つ描かれていることを踏まえると、正しい表記は *Msty* であると考えられるべきであろう。カリエは *msty* の表記を持つ S1C^a を解釈の資料としながらも、この部分を双数形として解釈している (Carrier 2004, 360–361; CT 2, 250)。

(15) フォークナーは、 を「二柱のマアト」を修飾する完了分詞、*shm* を「力」とし、「私に力を与えた (マアト)」(*rdit shm.i*) としている (Faulkner 1973–78, vol. 1, 128)。しかし、「私に」と与格として解釈する場合、接尾代名詞 *.i* の前に前置詞 *n* を必要とするため、意識であると考えられる。バルゲとカリエは、 について、*rdit.t(w)* であると判断し、「人」(*rw*) を主語とした関係形と解釈している (Barguet 1986, 437; Carrier 2004, 360–361)。その上で前者は「人が私に対して力を与えた (二柱のマアト)」, 後者は「人が私に力を持つことを許可した (二柱のマアト)」としている。しかし、両者の解釈はともに、関係形の中に目的語が含まれているため、文章として成立せず、疑問が残る。筆者は、*rdit* を使役の機能を果たす動詞 *rdi* の完了分詞、*shm.i* を *shm* を動詞とする名詞化された仮定法 *sdm.f* 形として解釈した。

(16) 呪文の題目は「(人間の) 隼になること、墓域で人をアク (*sh*) にすること、その者の敵に対して人に力を与えること、人がリネンの白いサンダルを履き、服を身に着けて話すこと」(*hpr m bik (rmt) sht s rdit shm s m hft(y). fdd s ib(iw) m hdy idmi sd(w) mnd*) である (CT 2, 226–227)。

(17) 変身の呪文については、吹田 1995 を参照。

この呪文では、オシリスの前で発せられた故人の叫びが「二柱のマアト」の前で繰り返されている。そして二柱のマアトには、「私の敵に対して力強くする」(*rdit shm.i m hft.i*)と説明されている。この点から、故人に力を与える独立した神としての「二柱のマアト」の性格がうかがえる。

(事例v) 呪文第416章 CT 5, 249a-250f [S2C^b]

- 249 [a] *r n kṛst*
 [b] *pr(i).n.i, hṣ(i).n.i*
 [c] *ḥs(i).i ḥst.n.i*
 [d] *irt.n.i ihm[st]*
 [e] *wn.n.i sbṣwy*
 [f] *pr(i).n.i hr r[wd]*
 [g] *[šsp] [.n]..i ḫnw-sw*
 250 [a] *ḥr.n.i r pt m (v)Mṣty*
 [b] *gm(i).n.i ist Rḥ-ḫtm*
 [c] *dd.sn ii wi dd(w) mṣt*
 [d] *ptr(w) nfrt*
 [e] *pr(i) hr rwd n mṣ-ḥrw*
 [f] *twt dd(w) iwt.f*

(18) S2C^a, B2Boより補足した (CT 5, 249)。

(19) フォークナーは、249eを受身の *sdmw.f*形としている (Faulkner 1973–78, vol. 2, 66)。

(20) B2Bo, B4Bo, M22Cより補足した (CT 5, 249)。

(21) B2Bo, B4Boより補足した (CT 5, 249)。

(22) ライツの辞書では一種の神格として説明されているが、詳細は不明である。また、B2Bo, B4Boに見られるような決定詞 *ḥr* とは一致しない。*ḥr* を持つ語としては、「(人に関して) 不満を言う」という動詞 *ḫnw-sw* という語が挙げられるが、呪文の内容との関連性は低い (CT 5, 249; Leitz 2002: vol. 1 623; Hannig 2009, 129)。

(23) カリエのみ、*ḥr.n.i r pt* を *sdm.n.f*形動詞文を名詞化した強調構文としている (Carrier 2004, 1028–1029)。

(24) 250d-fに解釈の相違が見られる。フォークナーは「汝は善いものを見る。声正しき者の階段を上れ、なぜなら汝こそは彼(自身)が来るであろうと言った者だからだ」とし、バルゲは、「美しいものを見る者よ。勝利の階段を進む者よ、汝は、『来るであろう者』と言う者だ」、カリエは「美しいものを見よ！ 正当化の階段を登れ。(なぜなら) 汝は『来るであろう者』と告げる者だからだ」としている (Faulkner 1973–78, vol. 2, 66; Barguet 1986, 159; Carrier 2004, 1028–1029; CT 5, 249–250)。しかし、いずれの解釈も決定的ではなく、特に250fの意味が曖昧である。これらの節の解釈について、筆者はまず、250eの *pr(i) hr rwd* に注目したい。この表現と類似する記述が同呪文中の249fに見られ、そこで「私は階段に出た」(*pr(i) hr rwd*)と述べられていることから、「私」が既に階段を上っていることが明らかである。したがって、250eは命令文ではなく、「階段を登りし者」と完了の能動分詞と解釈されるべきであり、その場合249fの内容との齟齬も生じない。また、250dの *ptr nfrt* も同様に「美しいものを見た者」と完了分詞として解釈ができ、さらに、その前節250cの *dd.k mṣt* に関しても接尾代名詞 *.k* を誤記と判断し「マアトを言いし者」(*dd(w) mṣt*)と解釈ができる。実際に250cには、*dd.k mṣt* と *dd mṣt* の2種類の表記がそれぞれ2例ずつ見られる。このように解釈すれば、「ようこそ!」(*ii wi*)に続いて「マアトを言いし者」、「善いものを見つけし者」、「声正しき者の階段に出た者」と死者への敬称の羅列が続き、より整合性のある解釈となる。また、250fに関しては、*ḥr* を「言う者」のような能動分詞ではなく、「言われし者」(*dd(w)*)と受動分詞、*ḫnw* を「彼が来んことを」(*iwt.f*)と仮定法 *sdm.f*形の名詞化として解釈した。この呪文の中で故人は、ラー・アトゥムの船員を発見し、「ようこそ」(*ii wi*)と迎え入れられる。この250fを船員らによる歓迎の発言として捉えるならば、筆者の示した「汝こそは『彼(死者)が来んことを』と言われし者である」という解釈は、死者が船員たちのもとへ来ることを歓迎される発言として、蓋然性が高いといえる。

(25) B2Bo, B4Bo, M22Cより補足した (CT 5, 250)。

私は行って、やって来た。私は私が紡いだものを紡ぐ。私が作ったものは、イヘメセトの紐だ。私は二つの扉を開けた。私は階段の上を進んでいった。私はイチェヌウ・スウを取った。私は天に向かって「二柱のマアト」とともに立ち上がった。私はラー・アトゥムの船員を見つけた。彼らは言う。「ようこそ！ おお、マアトを言いし者、善いものを見つけし者、公正しき者の階段に出る者よ、汝こそは『彼が来んことを』と言われし者である。」

後半部分では、故人はラー・アトゥムの船員を発見し、そこで彼らから歓迎の言葉を受ける。おそらく自身の正当性を認められた故人は、「ラー・アトゥムの船」すなわち太陽（神）の乗船を許されるのであろう。

第660章の事例(ii)に続いて、第149章(iv)と呪文第416章(v)の*Msty*の表現にも、「二柱のマアト」の独立した人格神としての側面が見られる。とりわけ第149章(iv)には、「二柱のマアト」が故人に力を与える神であることが明確に示される。

(事例 vi) 呪文第 682 章 CT 6, 312n-312p [B1Bo]

大いなる者に達する者として、ラーを彼の「二柱のマアト」へと登らせる者として、年の終わりのこの日に永遠に達する者として。

164

ていることから、正確な解釈と内容の理解が困難である (Faulkner 1973-78, vol. 2, 249)。この呪文の大まかな内容を示すと、前半部分では、故人の出自に関する神話的な説明がなされ、その後、イシスとネフティスによる問答がなされる。後半部分では、おそらく神官が語り手となり、故人が様々な力を備え、正当性を持つことを主張する。その後、故人の肉体がミイラとされ、力を得ることで天に昇り、そこに留まるというものである。

*Msty*の表現が見られるのは、この呪文の末尾(312o)である。ここに見られる動詞 𓂏𓂏𓂏 (*ser*)は、「登らせる」や「近づける」を意味する使役動詞であり、ここでは、*Rc*を目的語、*Msty*を与格として「ラーを彼の『二柱のマアト』へと登らせる者」という表現に用いられている。この点から、ここでの「二柱のマアト」は、太陽神ラーの到達点である天上に存在することがうかがえる。また、*Msty*の後には、神名に通常付加されることのない接尾代名詞 *.f* が付加されており、この点からも *Msty* を女神ではなく、天にある何らかの場所の名称として示されていると考えるのが自然である。同様の表現は、続く事例 (vii) にも見受けられた。

(事例 vii) 呪文第693章 CT 6, 326o-326p [B15C]

326 [o] *wn...k wn...k nn(?)...[⁽²⁷⁾*nmi*].k hrt*
 [p] *ph.n Rc ^(vii)*Msty**

…汝が天 [を横切る] のは、ラーが「二柱のマアト」に達したときなのである。⁽²⁸⁾

第693章は、B15C以外に現存する資料がなく、欠損も多いものの、簡潔な内容であり、大意をつかむことができる。その内容は、ラー・アトゥムやラー、トトなどの神々が、棺の所有者を祝福し、死者が力を持つことを望むというものである。*Msty*の表現を含む箇所は、ラーによる二度目の祝福の後に見られる。

第682章 (vi) と同様に、「達する」を意味する動詞 *ph* から、ここでの *Msty* もラーの到達点を指していると判断すべきであろう。「汝」は死者を指しており、ラーが *Msty* へと達した時に、死者が天を船で横切ることが可能となることが読み取れる。

呪文第682章 (vi) と併せて考えると、おそらくこの *Msty* は女神ではなく、天にある場所であり、太陽の到達点であると考えられる。マアトと太陽神ラーの関係は、マアトが「ラーの娘」(*sst Rc*) として表現されるように、通常は父子関係で示されるが、第682章 (vi) と第693章 (vii) に示された到達点としての *Msty* については、これまで触れられていない。この側面は、従来のマアトと太陽神との関係に新たな視点をもたらし得るものといえる。

(27) [] 𓂏𓂏𓂏 と語の最初の部分が欠落しているため、断定は難しい。 𓂏 (*i*) と決定詞と予想される 𓂏 から、フォークナーは 𓂏𓂏𓂏 「横切る」(*nmi*) とし、カリエは、 𓂏𓂏𓂏 「(乗り物によって) 走り抜ける」(*dii*) としている (Faulkner 1973-78, vol. 2, 258-259; Carrier 2004, 1584-1585)。筆者はこの呪文がラーの船の航行に言及する内容であることを踏まえ *nmi* と推測した。

(28) 326o と 326p の翻訳にあたって、フォークナーは 326o を主文、326p を従属文とし、バルゲ、カリエはそれぞれを主文としている (Faulkner 1973-78, vol. 2, 258-259; Barguet 1986, 154; Carrier 2004, 1584-1585)。筆者は 326o の移動の動詞 *dii* に注目し、326o を *sdm.f* 形の名詞化、326p を強調された副詞相当語句とする強調文であると解釈した。

5. 「二柱のマアト」の祭 (*ḥb Mꜣꜣty*)

(事例 viii) 呪文第 659 章 CT 6 280a~d [P. Gard.2]

- 280 [a] *r n smꜣ-ḥ*
[b] *ind-ḥr.k kꜣ ȝdt nb ṯḥnt m ḥb* ^(viii)*Mꜣꜣty*
[c] *ḥꜣ(i).i r wꜣꜣ.k*
[d] *gwr r rdw mꜣ Ḥmn iḥm(w) wrd*

着岸することの呪文。

万歳！ おお、東方の雄牛、「二柱のマアト」の祭におけるファイアンスの主よ。私はヘメン、疲れを知らない者のように階段にきつく結びつけられた汝の船へと下る。

「着岸するための呪文」である第 659 章は、死者がラーの船の一員になるための呪文であり、死者がその船へと向かう様子を描写したものである。この呪文は、不明な表現を多く含み、この「二柱のマアト」が何を表しているかについても不明瞭である。280c の *.k* は太陽神ラーを指し、280b の内容はラーに向けての呼びかけだと考えられる。ラーは「『二柱のマアト』の祭におけるファイアンスの主」として表現されているが、ラーがこのような形容辞によって表現される事例は少なく、「『二柱のマアト』の祭」(*ḥb Mꜣꜣty*) は他に例を見ないマアトの使用例である。⁽²⁹⁾ また、「マアトの祭」の細部に触れた研究は、未だなされていない。女神としてのマアトの崇拝が始まり、神殿が造営されるのは一般に新王国時代以降だとされているが、⁽³⁰⁾ この呪文は、「二柱のマアトの祭」と呼ばれる儀礼が中王国時代に存在したことを示している。理解の困難な表現が数多くあるとはいえ、この事例は中王国時代において女神のマアトが崇拝されていた可能性を示す興味深い事例といえる。

IV. おわりに

本稿では、「コフィン・テキスト」に表現された 8 例の「二柱のマアト」の記述を含む呪文に注目し、これまで注目されていなかったマアトの一側面を明らかにした。

III. 2 の事例は、「二柱のマアト」と下界の神であるソカルとの関係を示す。両者の関係は、古王国時代の「ピラミッド・テキスト」には認められず、マアトの概念が中王国時代には下界において重要な役割を担うようになっていたことがうかがえる。次に、III. 3 で取り扱った二つの呪文から、二柱の独立した女神としての *Mꜣꜣty* の性格がみてとれる。特に、第 660 章と第 149 章では、死者に対して力を与える「二柱のマアト」の性格が示されていた。この性格は、「二柱のマアト」が独立した神格として認識されていたことを示しており、正義や真実、秩序といった抽象概念とは明らかに異なる側面である。III. 4 の事例は、太陽神ラーの到達点としての *Mꜣꜣty* の側面を示す。これは、太

(29) 280b の *nb ṯḥnt m ḥb Mꜣꜣty* の部分について、その他の考えられる解釈は、*m* 以下を副詞句とする副詞文の解釈が挙げられるが、*kꜣ nḥt* のような神への敬称が直前で表現されているため、*nb ṯḥnt m ḥb Mꜣꜣty* も一種の敬称であると解釈すべきであろう。

(30) 古王国時代、中王国時代にマアトの神殿がなかったことも指摘されている (Helck 1980, 1114)。

陽神ラーとマアトの関係を理解するうえで重要な、マアトの新たな性格をうかがわせるものである。

マアトの特殊な形態として「コフィン・テキスト」に見られる「二柱のマアト」(*Ms·ty*)は、後の「死者の書」の審判の場面における「二柱のマアトの間」に見られるように、古代エジプト人の思い描くマアトの概念の本質に関わるものといえる。しかし、二柱の女神として現れるマアトの研究はこれまで十分に成されていない。「コフィン・テキスト」の「二柱のマアト」はこれまで論じられなかったマアトの側面を理解するうえで貴重な事例である。依然としてその存在が確認されるのみに留まる「二柱のマアト」への注目は、マアト研究の進展に重要な意味を持つものであり、今後の研究による更なる解明が望まれる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、関西大学文学研究科の吹田浩教授、カイロ大学考古学部のサラハ・エル・ホーリ教授に多大なるご教示を賜りました。なお、本研究は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成25年度～平成29年度、事業番号S1311041）の研究成果の一部です。

略号一覧

CT : Buck, A. de 1935–61: *The Egyptian Coffin Texts*, 7 vols., Chicago.

CT 2 : Buck, A. de 1938: *The Egyptian Coffin Texts*, vol. 2, Chicago.

CT 5 : Buck, A. de 1954: *The Egyptian Coffin Texts*, vol. 5, Chicago.

CT 6 : Buck, A. de 1956: *The Egyptian Coffin Texts*, vol. 6, Chicago.

CT 7 : Buck, A. de 1961: *The Egyptian Coffin Texts*, vol. 7, Chicago.

B1Bo : の棺（外棺），ベルシャ出土，ボストン美術館蔵：Boston 20. 1822–1827.

B2Bo : の棺（内棺），ベルシャ出土，ボストン美術館蔵：Boston 21. 962–963.

B4Bo : （女性）の棺（内棺），ベルシャ出土，ボストン美術館蔵：Boston 21. 966–967.

B1C : の棺，ベルシャ出土，カイロ博物館蔵：Cairo 28083.

B3L : の棺（内棺），ベルシャ出土，大英博物館蔵：B. M. 30842.

M22C : 所有者不明の木板，メイル出土，カイロ博物館蔵：Cairo JE42828.

P. Gard.2 : 所有者不明のパピルス，出土地不明，大英博物館蔵（詳細不明）.

S1C^a : の棺（内棺），アシュート出土，カイロ博物館蔵：Cairo 28118.

S1C^b : の棺（内棺），アシュート出土，カイロ博物館蔵：Cairo 28118.

S1Chass : の棺の蓋部分，アシュート出土，所在地不明.

S2C^a : の棺（外棺），アシュート出土，カイロ博物館蔵：Cairo 28119.

S2C^b : の棺（外棺），アシュート出土，カイロ博物館蔵：Cairo 28119.

S1P : の棺（外棺），アシュート出土，ルーブル美術館蔵（現在は所在地不明）.

参考文献

Altenmüller, B. 1975: *Synkretismus in den Sargtexten*, Wiesbaden.

Assmann, J. 1990: *Ma'at: Gerechtigkeit und Unsterblichkeit im Alten Ägypten*, München.

Barguet, P. 1986: *Les textes des sarcophages égyptiens du Moyen Empire*, Paris.

Bleeker, C. J. 1929: *De betekenis van de Egyptische godin Ma-a-t*, Leiden.

Carrier, C. 2004: *Textes des sarcophages du Moyen Empire Égyptien*, 3 vols., Orne.

Faulkner, R. O. 1973–78: *The Ancient Egyptian Coffin Texts*, 3 vols., Warminster.

- Frankfort, H. 1948: *Kingship and the Gods: A Study of Ancient Near Eastern Religion as the Integration of Society and Nature*, Chicago.
- Guglielmi, W. 1982: “Netz,” in W. Helck and E. Otto (eds.) 1982: *Lexikon der Ägyptologie* vol. 3, Wiesbaden, 464–465.
- Hannig, R. 2009: *Großes Handwörterbuch Ägyptisch-Deutsch (2800–950 v. Chr.): Die Sprache der Pharaonen*, Marburger Edition, Mainz am Rhein.
- Helck, W. 1980: “Maat,” in W. Helck and E. Otto (eds.) 1980: *Lexikon der Ägyptologie* vol. 3, Wiesbaden, 1110–1119.
- Hornung, H. 2005: *Der Eine und die Vielen: Altägyptische Göttervorstellungen*, 6th ed., Darmstadt.
- Karenga, M. 2004: *Maat, the Moral Ideal in Ancient Egypt: A Study in Classical African Ethics*, New York.
- Leitz, C. (ed.) 2002: *Lexikon der ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen*, 8 vols., Leuven.
- Lichtheim, M. 1992: *Maat in Egyptian Autobiographies and Related Studies*, Göttingen.
- Morenz, S. 1973: *Egyptian Religion*, London, 1974.
- Moret, A. 1940: “La doctrine de Maât,” *Revue d'égyptologie* 4, 1–14.
- Sethe, K. 1910: *Die altägyptischen Pyramidentexte: Nach den Papierabdrücken und Photographien des Berliner Museums*, vol. 2, Leipzig.
- Teeter, E. 1997: *The Presentation of Maat: Ritual and Legitimacy in Ancient Egypt*, Chicago.
- Tobin, V. A. 1989: *Theological Principles of Egyptian Religion*, New York.
- Wiedemann, A. 1887: “Maa: Déesse de la vérité et son rôle dans le panthéon égyptien,” *Annales du Musée Guimet* 10, 561–573.
- Wilson, J. A. 1954: “Authority and Law in Ancient Egypt,” *Supplement to the Journal of American Oriental Society*, 17, 1–7.
- Willems, H. (ed.) 1996: *The World of the Coffin Texts: Proceedings of the Symposium Held on the Occasion of the 100th Birthday of Adriaan de Buck, Leiden, 17–19 December 1992*, Leiden.
- 吹田 浩 1995: 「コフィン・テキスト第275章」『関西大学文学論集』44, 311–327.
- 肥後時尚 2015: 「古代エジプト古王国時代のマアトの一側面：ピラミッド・テキスト第260番から」*The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture* (関西大学国際文化財・文化研究センター紀要) 2, 215–228.